

---

# ~ 7月6日曇り時々晴れ ~

上村忍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「7月6日曇り時々晴れ」

### 【Zコード】

N71880

### 【作者名】

上村忍

### 【あらすじ】

大事な会議の朝、寝坊、そんな死にたくなるような」ともすべて神様に決められていることかもしません。

そんなお話を。

(前書き)

この世の流れが、誰かに決められている。

そんなこと思つたこと、ありませんか？

人生つてものを考えたことはあるだらうか？

人は考える葦であるつていつた哲学者もいたけど（葦つて結局なんだ？）俺にもこれを読んでいる君にも、「人生とは」なんて語ることなんかできないんじやないかな。

だつて、人はたゆむことのない時間の中を、ただ流れ続けているだけだから。

俺たちには抗いきれない何かに、突き動かされているだけなんだから。

大方、この宇宙はばかでかい何か生き物が作った実験空間で、そこで死んだり生きたり笑つたり泣いたり怒つたりしている人間なんかを見て、そのでかい生き物はまた、笑つたり泣いたり怒つたりしているのかもしれない。

そう考えると、生きていくのもアホらしくなつてしまわないかな。

君たちが怒つたり笑つたりして浮いたり沈んだりしているのを、優雅に眺めている何かがいると思うと。

今日は、そんなことを考えて生きることがアホらしくなつた男のちよつと不思議な話をしてみることにする。

男は、目を開けた。

チュンチュンといつ鳥の鳴き声がわわやかな朝を演出しているのに  
もかかわらず、男の頭は重かつた。昨日の酒がまだ残つてゐるよう  
だ。

時計を見る

「7月6日AM9:32」

デジタルの時計が青い光を放つていた。

見た瞬間に、寝ぼけた頭に冷水をかけられたようになつた。  
会社に行く時間は、仕事に行く時間はもうとっくに過ぎていた。

今日は、大事なミーティングの日。俺の持つ資料がないと始まらない。  
い。

昨日は遅くまで残つてその資料を作つて…

「できたー」とつてことで、家に帰つてきて、前祝だつて酒を飲んだ  
つた。

ビール1本しか飲んでないよな…

ベッドから飛び起ると、足元にあつたものを蹴飛ばした。

500ミーの缶が3本。記憶を飛ばしたようだつた。

とつあえず、携帯をチョックする。ピカピカとライトがついており、それはまるで死刑執行の印のよつとも思えた。

顔も洗わずに、大急ぎで着替え、車に飛び乗る。

会議は9時からだった。今から飛ばせば、10時には着けるはず。先方にはどうやつて言い訳しよう…車が壊れて…A.F…携帯はトイレに落として…

12年乗っている古いカローラは、つたないエンジン音を上げながら発信した。

とつあえず、会社に連絡を…いや、待てよ、携帯が壊れてて、それでも急いだ間を出したほうが…寝癖はどうやってごまかすんだ…

前を走るジビックにイライラしながら、車を飛ばす。いつもなら絶対にしないが、ウォンウォンと煽つてみる。

一向にスピードを上げないジビック、しびれを切らした男は追い越しにかかった。

目の前にトラックがいた。それが男の最後に見た瞬間だった。

男は、目を開けた。

チコンチコンと、う鳥の鳴き声がさわやかな朝を演出しているのにかかるわらず、男の頭は重かつた。

トラックは…あれ？俺、会社…へ？

時計を見る。

「7月6日AM9:32」

デジタルの時計が青い光を放っていた。

あー、夢だったんだ。良かつた、良かつた。

すいぐリアルな夢だったな。すみすみまで鮮明に覚えてるや。

夢で良かつた。死なずに済んだ。

…良くないぞ、ミーティングは？

ベッドから、猛烈な勢いで男は飛び出した。

携帯をチェックする。チカチカとライトを呼んでいる。

無視して、顔を洗った。少し目が冴え、思考も冴える。

とりあえず、会社に連絡をしたほうが良さそうだ。

しかたなく、携帯を開き、会社に電話をかける。

1、2コールで、相手が出た。

「はい、丸仏商事です。」

「すみません、内線10番お願いします。勤務していた佐々木です。

「

「…佐々木さん?」

「はい、すみません、ハーティングなのに遅れちゃって、早くつないでください」

「…いたずらはやめてください。佐々木さんなり、一年前に交通事故で亡くなりました」

「はい?よく聞けなかつたです?いいから、早くつないでください」

「これ以上言つなり、警察に通報しますよ。品川になんていたずらをするんですか?」

「品川?誰の?」

「佐々木さんのですよ。一年前の今日、交通事故でトラックにぶつかって、亡くなつたんですよ。いたずらはやめてください」

ガチャン。受話器をたたきつけられた。

ツーシーツー。

男は口を開いたまま、携帯を取り落とした。

え?俺が死んだ?トラックと事故で?

ふりふりビグビグに腰をかける。

何かの間違いだ。おかしい。俺はだつて、じつして生きているじやないか。

携帯を拾い、カレンダーをチェックする。

そこには、

「2008・7・6」

とあつた。

今年は2007年だつたよな…なんてこつた。

これは夢だと言い聞かせながら、洗面台に行き、頭から水をかぶる。心地いい水は頭に刺激を与えてくれたが、夢を覚ますにはいたらなかつた。

ビシャビシャの頭で鏡を見る。昨日までの自分と同じ。頬をつねつてみようかと思つたけど、あまりにお約束なのでやめた。

どうやら俺は死んだらしい。1年前に。

自分の居場所がこの世にないといつのは、不思議な感覚だった。

俺は、携帯電話にあつた番号に片つ端から電話をした。

親兄弟恋人、みんな会社の受付嬢と同じ反応だつた。気持ち悪がられて切られる。

今まで一番硬いと想つていた絆も、1年という年月が簡単に切つてしまつたようだ（ま、死人から電話がかかってきては無理もないが）ア行からかけていた電話も簡単に行まで来た。最後に残つたのは、「和田敦」、大学の時の友人でいつあつたのかも覚えていない奴だつた。

トウルル…

「はい、和田です」

「あ、久しぶり。佐々木…だけど。」

「おーーーー！佐々木かー久しぶりだなあ！」

ん？反応が違う。

「大学を卒業してからだから、3年ぶりか？元気だったか？」

どうやら俺が死んだことを知らなかつたらしい。

「あ、ああ。ま、元気つていつたら元気かな。」

「どうしたこんなに朝早くから、たまたま俺は今日非番だったから良かつたけど、なんかあつたのか？」

「いや、特に用事つて程じゃないんだけど…あ、今日の夜とか暇かな？」

とつさに言葉が出た。今の俺は、一人の人間としてみてくれる和田の存在がありがたかった。

「え？ 今日か？ 暇だけど……あ、わかつたぞ、飲みに行く奴を探してたんだな？」

「あ、ああ。ま、そんなところかな。で、大丈夫なのか？」

「ああ、いいぜ。久しぶりだな。昔の居酒屋に行くか？ じゃあ、7時にススキノの改札前で」

「…ああ。わかつた」

電話は終わつた。

どういうことかわからないけど、今、俺は死んだ人間で、俺の存在を認めてくれるのは和田だけで、その和田と今日飲みに行くことになつた。

実家に帰るとか、他にやることもあるだろうけど。

信じたくないが、1年前に俺は死んでいたのだ。今、こうしている自分は誰なのかわからないけど、俺は俺だった。

ぐう。

死人でも腹が減るのだろうか？ 俺は、冷蔵庫を開けた。

冷蔵庫の中には腐った食べ物たち。賞味期限の切れが調味長などが入つていた。

俺は、その辺にあった服を着て、近くのコンビニまで出かけた。

コンビニでおにぎりを買ひ、近くの公園でほおばる。

1年経つたコンビニおにぎりも、記憶していた味と変わらなかつた。  
科学の進歩もたいしたことないようだ。

食べながら考える。

なぜ俺はよみがえったのか？なぜ死んだのに今日とこいつ田を迎えて  
いるのだろうか？

普通に考えてこんなことはありえないし、誰も信じてはくれないだ  
らひ。

もちろんそんな自問自答に答えてくれる声はなく、一人悶々とした  
まま時が過ぎていった。

ふと氣づくと時計のハリは6時を回っていた。ずいぶんと俺は考え  
込んでいたようだ。

俺は重い腰を上げ、ススキノに向かった。

ススキノ改札前は、人でごった返していた。そんな中、俺は大学時代とは変わらない和田を見つけた。屈託のない笑顔で和田は手を振  
つていた。

「ひさしひだなー」

大声で声をかけてきた和田といつも行っていた居酒屋に向かへ。

「#話ははいりでよく語つし合つたもんだな」と、和田。

「やうだっけか？」

と俺はビールを飲みながら言つた。

「やうだよ、お前はいつも「俺はビッグになつてやる」つてこきまつていたじゃないか」

「#話の話れ……」

「やうこや、今、お前は何をやつてるんだ？」

「あぬ会社の営業だよ。ビッグが聞いてあきれるな……やうこつ和田は向をやつてるんだ？」

「俺は自分のやりたい」とをやつてるよ」

「もしかして、警察か？」

「ピンポーン。俺は警察になつて悪い奴を取り締まるのが夢だつたからな。まだ日は浅いから犯人逮捕はないんだけど、いつでも出動の準備はできてるつもりだぜ」

「やうか、お前の夢だつたもんな・・・大学の勉強はおもしろくな。俺は警察になるつて、酔つ払つて言つてたつけ」

「夢は願えば叶うのや」

俺と和田は、ビールを飲みながらとつとめもない話をした。

死人と警察官。妙な組み合わせだつた。

死人は言った。

「なあ、もし自分の存在がこの世の中から消されて、誰も知らない世界に行つてしまつたとしたら、お前はどうする?」

「なんだ、やぶから棒に?」

「どうする? お前のことを知つてゐる人間は誰もいない。その上、みんなお前のことは死んだつて思い込んでるんだ」

「ん~よくわかんないな」

「で、どうする?」

「俺なら、誰も俺のこと知らないなら、それだけ俺のことを新しく知ることができるつてことだつて想つ。それで、友達を増やすかな」と見ゆるよつにじてゐるんだ

「すごいぶんとポジティブな考え方だな」

「だつてよ、物事には2面性があつて、いいことも悪いことも見方を変えればどちらにもなるんだ。だから、それなら俺は常にいいことに見ゆるよつにじてゐるんだ」

「気楽な生き方だな。へらやましこよ」

「けど、この2面性の考え方ってのはすごく難しいんだよ。その日の体調とか気分でやつぱりネガティブになってしまふこともあるんだ」

「なんか分かる気がするな」

「そういう時は、何か大きなものが俺を突き動かしてるんだって想うよ。俺が必死こいて考え出したものも、実は誰かに操作されるつてさ」

と、和田ははしの先でザンギをつつきながら言つた。

「それって、なんか切ないな…自分の決死の判断も、実は操られて、その結果も分かりきつているつてことか。その分かりきつた結果で俺らは一喜一憂するのか…なんか情けない話だな」

「ま、そういうなよ。人生あんまり捨てたもんじゃないって。ところで、お前はどうして今日いきなり俺に電話かけてきたんだ?なんかあつたんじやないのか?」

「ん?いや、何もないんだ…いいんだ。もう。もうやうやう出ようか」

俺は、返事を待つ前に席を立つた。

「また飲もうな」と口約束を交わし、俺たちは別れた。

なんの因果か分からぬけど、俺は死んで1年後に誰にも認められない中生き返った。それも全部、俺の意志ではない中で。

たとえ、何か意志を持ったとしても、何も変わらなかつたんじゃないか。

決して抗えないことがこの世の中にはあるんだね。

12時を回つた時計を見ながら、俺はなんだかどうでも良くなつた。

ススキノのネオンは怪しく、田が変わつても消えることはない。

俺は、道路に身を投げた。

身を投げた瞬間、雲間から晴れた空が見えた。空には天の川。

そういうや、今日は七夕だつけ？

願いは何にしよう。

「もどりてえな」

口にした瞬間、トラックが田の前をふさいだ。そして、視界は闇に消えた。

男は、目を開けた。

チュンチュンという鳥の鳴き声がさわやかな朝を演出しているのもかかわらず、男の頭は重かつた。

時計を見る。

ぼんやりとして少し立つた後、携帯を手に取った。

カレンダーをチェックする。

「2007・7・6」

どうやら、願いは聞き届けられたらしい。

元に戻つたのは、男の意志だった。

どこの誰がかなえてくれたのかはわからないが、俺は大きな力に抗つたのだろうか。

それともこれらも全部、シナリオの中なのだろうか？

わからないけど、とりあえず男は携帯の発信ボタンを押した。

「・・・はい、はい、ええ、すみません。先方にはくれぐれもよろしくとお伝えください」

今日一日晴れて自由の身になつた俺は、カーテンを開けた。

曇り空だつたけど、男は知つていた。雲間から流れる天の川が見えることを。

そして、一喜一憂しながら生きるこの俺の人生を、仮に誰かが見ていたとしても、操作していたとしても、楽しむこともできるつてことを。

男は携帯を開き、もう一度発信音を押した。

「ああ、突然すまん。いや、今日会えないかなーなんて。だって、  
明日は七夕だし」

(後書き)

ちなみに、僕の人生のとんでもなく大事な日の前の日に書きました。  
なんか思つところがあつたんでしょう。今となつては、謎ですが：  
ちょっと戻つてみたいかなーなんて。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7188o/>

---

~7月6日曇り時々晴れ~

2010年11月5日02時44分発行